

ぬかせ候處果してきず有之候に付、盜賊對して御仕置片付、其事御代參の女中へ、大乘院より物語候處、上の御耳に入瘤をとり候哉、相尋候様にと被仰付候て、とり候様申候に付、御代になり、西元哲一時に被召出、四百俵被下、

〔漫遊雜記上〕乳岩不治、自古然而和蘭書中有言曰、其初發如梅核之時、以快刀割之、後從金瘡之法治之、斯言有味、雖余未試之、書以告後人、

### 〔牛渚漫錄二〕人肉補人

陳藏器曰、人肉治羸疾、自是閭閻相效、割股以博孝名、在我邦亦有爲利剗股者、一富商患廣東瘡、鼻剗落無形、瘍醫割自己股肉以罨其鼻、麻線縫之、封以膏、獲巨金、蓋以肉補肉、漢土亦有之、姑妄聽之云、大學士溫公言、征烏什時、有驍騎校腹中數刃、醫不能縫、適生俘數回婦、醫曰得之矣、擇一年壯肥白者、生剗腹皮、繫於創上、以匹帛纏束、竟獲無恙、創愈後、渾合爲一、痛痒亦如一、公謂非戰陣無此病、非戰陣亦無此醫、信然、鳧亭詩話云、吾墜馬、腦髓迸流、神魂飛越、蒙古神醫丞以牛腦實之、卽以生牛胃首、使真氣聚而不洩、三月而能起立、然記性頓減、前後如兩人、余惜不以人腦耳、

### 〔陸軍歴史五砲銃鑄造〕鐵砲治療書出版之義申上候書付

江川太郎左衛門○中

銃創療治之道未ダ其理ヲ究メザルヲ憂ヒ、大概俊齋ヲシテ、銃創ノ療方ノ一冊ヲ編セシメ、銃創瑣言ト名ヅケ、自ラ○江川太郎左衛門其序ヲ撰ブ、○序略

### 〔醫心方十八〕治湯火燒灼方第一

病源論云、凡被燒者、初慎勿以冷物及井下泥、及蜜淋渝之、其熱氣得冷、冷却深搏至骨、爛人筋也、所以人中火湯瘡後、喜率縮者、良由此也、

### 〔松屋筆記七十〕やけどの妙藥

湯火傷には、木瓜の水を傳れば速に痛去りて平癒す、そは赤くなりたる胡瓜をきざみて、磁器に